



## 健康的なセキュリティ

JNSA 理事  
株式会社エヌ・ティ・ティ・データ  
土屋 茂樹

長い間、セキュリティに関する事故がとどまるなどを知らない。本来実施すべき対策が不十分で事故につながってしまうものはもちろんのこと、一見最新の対策を講じたとしても、すぐにその対策を潜り抜けるような脅威が発生し、防御システムはいとも簡単に突破されてしまう。セキュリティは対策と脅威が常にイタチごっこであり、どうにかならないものかと考えることもある。

このイタチごっこの関係は、コンピュータウィルスという名前があるくらい、生物とウィルスの関係にとても似ていると感じている。ウィルスが細胞膜の中にちゃっかりと入り込むときのなりすましの技は天下一品である。どのように免疫機能が防御しようとも、あらゆる手を使ってその裏をかいてくるのである。またあまりウィルスの毒性が強すぎる場合、徐々に毒性を減らしていき、より長期間宿主で延命できるように変異していったりもする。さらには、ウィルスが寄生主の中に入り込み、結果的に寄生主の遺伝子の一部となって、新たな生命体となることもある。敵のソースコードの採用である。

結局、ウィルスは生物と同じくらい大昔から存在したし、何億年もの戦いや共生等の歴史を通じて現在にいたっており、依然としてウィルスと生物は両者とも存在している。情報セキュリティの世界にあってもイタチごっこは終わらないのではないか、と思うのである。

一方で、守られている側である、内部の組織・システム自身も強靭になっていく必要がある。これまで以上に組織構成はグローバル化などで複雑化し、システムは社内社外と接続先を伸ばし、アーキテクチャも多様化している。戦線は拡大の一方であり、攻撃側もさらにレベルを上げている中で、内部を防ぎきるのはほぼ現実的ではなくなっている。作りっぱなしになっているかもしれないリスク分析シートや、災害復旧計画(DRP)、事業継続計画(BCP)を再度ひも解いて、性悪説に基づいたセキュリティ設計をやり直してみる、等のアクションも必要なのではないかと思う。

我々が目指すべき姿は、少しくらいのウィルスが来ても大丈夫な、健康な体である。健康でいるためには、免疫力を高めると同時に、バランスよく栄養価の高い食事をとったり、定期的に運動したりといった努力が必要である。セキュリティの観点においても、組織やシステムが「健康である」ための地味な努力が欠かせない。地味な努力をいかに継続的に実施できるかが、結果的には「急がば回れ」ではないだろうか。